

芹沢光治良

第五卷・失われた人

人間の運命

人間の運命

第五卷・失われた人

芹沢光治良

人 間 の 運 命

第五卷 失われた人

昭和39年 5 月 26 日 印刷

昭和39年 5 月 30 日 発行

定価 400 円

著 者 ©芹沢光治良

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町71

振 替 東 京 8 0 8

電話東京(260)1111(大代)

印刷 株式会社 金羊社 製本・神田 加藤製本所
乱丁本はお取替えいたします。

© by K. Serizawa. Printed in Japan

人間の運命

第五卷

失われた人

第一章

九月一日の地震が、日本の社会を根こそぎ揺り動かし、ひいては次郎の運命を狂わすほどの大震災になろうとは、その日、次郎は思いもしなかった。

役所の三階から電車通りに転げるように逃げ出して、しゃがみこんでいたが、余震もおさまったようなので、役所へ引きかえそうとした。同室の田辺や林や若い雇員もいっしょだった。役所の裏門から十数人の人が出て来た。坂田が汗ばんだ額にふりかかる髪を掌でなで上げながら、笑顔で近づいた。

「森君。あぶないから、帰れって言うんだ、守衛が。部屋はあのままにしておけば、いいそう
だ。……余震がひどいと、煉瓦だから崩れるよ、……どこの部屋も引きあげたからな——」

「ほくは鞆をとって来る——」

「鞆って、持ってるじゃないか……」

通勤用の赤皮の折鞆を、次郎は持っていた。最初の震動で机の下に無意識にかくれて、その後、三階の部屋からあわてて逃げ出す時、どうしてそれをもったのであろうか。電車通りで地

べたにしゃがみこんだ時にも、気がつかなかった。

「あ、ぼくは鞆を忘れていた。大事な書類を入れてあるが……いいか、月曜日まで——」

そう、田辺は白麻の上衣についてたどろを払いおとしながら、次郎や坂田といっしょに電車通りの方へ歩き出した。坂田は、大地震だったなあと、大きな声をあげて、道路の両側の傾きかけた家々を眺めながら歩いていて、地震のあとでも渋谷の先のテニスコートへ行くつもりらしく、市電がとまっても、省線は大丈夫だから、有楽町で電車に乗ろうと、次郎と田辺を促した。

街には音響がたえて無気味なくらい静肅だ。人通りも少なく落着いていた。よく晴れていたから、次郎も田辺も予定どおりテニスに行くことにした。しかし省線もとまっていた。いつ開通するか見込みがたないとの、駅員の話だ。次郎たちは顔を見あわせた。もうテニスどころではない気がして、すぐに三人とも歩き出していた。

次郎と坂田と田辺は「分室の三学士」と渾名されるほど、仲がよかった。もともと役所には、特に農務局には、法学士と農学士との間に暗黙の争闘があつて、よどんだ空気がたちこめていた。

法学士は役人として将来を保証されて、任官して何年目にはどうなると、大体一生の進路が、はつきり階段のようにきまっていた。帝大を出て採用せられるのは、その階段の最下位につくのだが、とたんに階段の方がエスカレーターのように動いてくれるので、じっと立ってさえいれば、三年目には高等官六等、五年目には五等、四等、勅任官……というように、健康である

限り、自然に立身出世する仕組であつた。それに反して、農学士の方は、同じ帝大を出ていながら、法学士のように便利なエスカレーターがないから、自力で昇進しなければならぬが、一段一段歩いてのぼるようにおそいので、エスカレーターにのつた法学士の立身出世を、下から羨望して見上げることになった。それが、農学士には不愉快だが、これも制度の罪で、個人に責任はないのだが……法学士の方はまた、同じ部屋でも、農学士を敬遠し、無視して、個人的に親しもうとはしなかった。こんなところから、法学士と農学士との間に、暗黙の争闘が起きるのだが、立身出世を念願としない次郎は、人間を法学士や農学士で区別しなかつたし、坂田と田辺を一年の先輩として親しんだ。幸いなことに、田辺は学者志望であり、坂田は磊落で将来政治家になろうと、秘かに野望を抱いていたから、次郎と馬があつた。部屋の会議でも、三人の意見がよく一致したが、昼食後の休憩や退庁時などにも、おたがいに誘いあう有様で、部屋の若い雇員たちも、ひそかに三学士と渾名してその友情を羨望していた。

そんなわけで、その折も、三人は有楽町から期せずして、ともに足が渋谷の方へ向つていたのか、黙々と日比谷の十字路をわたり、お濠端を半蔵門の方へ歩いて行つた。

日比谷公園のなから盛んに白煙がもくもくあがつていた。次郎たちも軌道をわたつて公園にはいつて見ようとした。地震で松本楼が失火したと、叫ぶようにして、公園がら走り出る学生があつたが、火事場のような騒ぎもなかつた。

「案外大きい地震だったかも知れんぞ」と、坂田は立ちどまつた。

「これから、ぼくの家へ行かんか」

坂田はその春故郷の島根で結婚した新妻の待つ、東中野の家が、心配になった。

「東中野まで歩くのは、しんどいなあ。ぼくの下宿なんかも、壁がおちて、本なんかちらばってるかも知れんよ」

そう田辺が言った刹那、三人とも足払いをくったように、足がもつれて、その場にすくんだが、すぐにしゃがみこんだ。大きな余震だった。大地にへばりつくようにして顔を見あわせたが、血の気がひいていた。起き上ると、自然に各自わが家へ急いでいた。

次郎は青山六丁目に住む田辺といっしょに、馬場先門で坂田に別れて、虎ノ門の方へ歩くことにした。麻布広尾町へ帰るのに、市電の軌道を伝わる以外に方法がなかった。行く先、どこでも市電がとまり、瓦が落ち、傾いた家が多くて、通りに人々が出て不安そうに佇んでいた。

「ひどい地震だったが、昼間でよかった。夜だったら、たいへんなことになったろうな」

そう田辺は吐息したが、通りに佇んでいた人々の表情にも、同じことをうかがえた。六本木にたどり着いた時、次郎はふと後方をふり向いて、息をのんだ。六本木がやや高い岡の上のようなのにも、初めて気がついたが、南の方から異様な雲が湧きあがり、晴れあがった空に、巨大にひろがるうとしていた。

「あの雲——」

「おかしい雲だね……三年前の夏、追分で見えた浅間山の大噴火を思い出させるな」と、田辺もしばらく眺めていた。

「あの時も、すみわたった空に、大きな花キャベツのように噴煙が見えたが……もくもくと噴

きあげて、すぐに花キャベツがくずれて、空一面をおおったけれど……これは夕立雲かも知れんね」

それが、本所深川方面から、全東京を焼きつくす劫火の兆だとは、その時、次郎たちも気がつかなくて、すぐ材木町から霞町の方へ坂を下って、そこで、次郎は田辺と別れた。

田部氏の家では、夫人が女中と家の横の巨大な樫の根もとに、椅子をもち出して、ふるえていた。地震も大きかったが、しきりなしな余震が怖ろしくて、屋内にいられないと、言うのだった。次郎が帰って二時間ばかり後に、田部氏がもどって来た。

京橋の第一事務所から、深川の第二事務所へ向う途中、兜町のそばで、電車が脱線して大地震だと知ったが、第二事務所へ行くのを断念して、第一事務所へ引返したところ、その、川にのぞんだ木造の古い二階家が、瓦がおち、壁がくずれて、川へのめって、四人の所員が、書類などを外へもち出す傍で、ここに住みこんでいる松浦支配人夫婦が、埃まみれな顔で、呆然としていた。想像以上の大地震だと、田部氏はさとり、金庫のなかのものを出してから、支配人夫婦にも避難をすすめた。支配人は第一事務所を死守すると言うし、一番若い社員の芝が田部氏に代って、第二事務所へ連絡に行くと、言っけがなかった。その夕、浜から曳船が二隻第二事務所にはいる予定であるが、主任の横田老がまだ出勤しないでくれればいいが――、田部氏は支配人夫婦や所員にも、無理をしないで、万一の場合は麻布の家へ避難するように注意を残して、歩いて帰った。そう告げてから、あわてて夫人に話した。

「そうだ、有田君の控家はどうか。お子さん達がいるのじゃないか。こわがっているだ

ろう」

「婆やさんの話では、二三日前に、節子さんが帰って来たそうですが」

「次郎、見て来てくれんか。節子さんは此処へつれて来た方が安心だろうからな」

正門から百米もはなれない筈町である。道路の反対側で、一寸はいった小路の突きあたりに、二軒同じような門構の小さな二階家があるが、左側が有田氏の控家である。いつも閉じている木の門が開いていて、節子が外側に木の門柱の根もとにしゃがんでいた。浴衣に赤い帯をおたゝきに結んで、まるで少女に見えた。同型の隣家の門も開いていて、隣家の主婦であろう、若い女が五つばかりの男の子の頭を膝に抱えるようにして、節子に向きあつてうずくまつていた。大地震で外へ逃げ出したものの、余震で屋内へはいれない恐怖が、二人を近づけたが、おびえて口もきけない様子であった。

次郎は田部氏の家へ誘ったが、節子は婆やがもどるのを待たなければならないと言った。

「婆やはどこへ行つたんですか」「買物です」「昼前に出て、まだ帰らないのですか」「いいえ、一時間ばかり前に出ました」「なにか地震で、損害でもありましたか」「いいえ、壁が少しおちただけですけれど」——腰がぬけたようにしゃがんだまま、顔を上げて答える節子を、次郎は見おろしていた。隣家の婦人が言葉をはさんだ。

「ここなら、屋根瓦のおちる心配もなし、いざという場合には、成瀬さんのお庭へ一走り逃げればいからって……お嬢さんと話していたところですよ」

次郎は婆やがもどったら、田部邸に避難するようにすすめて、引きかえした。

節子が田部邸に來たのは、二三時間後の、黄昏時であつた。黒っぽい着物に着換えて、化粧もしていた。婆やが小さな風呂敷包と一枚の毛布をもつて送つて來た。彼女は買い集めた百目蠟燭を幾本かおいて、隣家の人々と家をまもるからと、あわただしくもどつて行つた。

その頃には、空にわきあがつていた白雲が、夕焼雲のような色をして空をおおい、東京中が焼けているという噂をまいて、屋敷の下の市電の線路を、避難民の群が、天現寺橋の方へ通りはじめた。

田部邸へも、避難者が次々に現れた。第一事務所の所員が駆けこむようにして来て、事務所が四時近くに類焼したと、しゃくり上げた。消防も防火する人もなく、どこでも焼けほうだいだったと、報告した。支配人夫婦と、事務所の最後を見届けて、いっしょに避難したが、途中で煙や混雜にまぎれて見失つたと、支配人夫婦の安否を心配して、通つた街々の模様を、喋りたてた。

余震がするので、危険で、サロン前の石畳式のポーチに椅子を出して、そこにみな集つた。

停電しているのに拘わらず東京の焼けるほてりで紅く明るかつたが、ごうごうと地軸からでも響くように、微かだが腹にしみる音がつづくなかに、時々爆破でもするような音響がまじつて、不安でならない。何処まで焼けるか、消火の方法がなくて、火に委せているというが、次郎は落着いていられなかつた。全東京が焼けるというのに、どうしたらいいか——駈けるようにして、材木町から六本木へ出て見ようとしたが、火に追われて黙々と避難する人々の波に、逆らうことができなかった。近所の人々も、みな家をすて、道路端にかたまつて、ふるえていた。

「次郎、外へ出ないで、ここで落着いて、どんなことになるか、待たんか」

見かねて、田部氏が声をかけた。この地震は東京だけであるか、横浜はどうか、箱根の向う側、沼津はどうか、沼津の別荘には隠居が滞在しているかと、田部氏は焼けおちる銀座付近の多くの貸家や京橋と深川の事務所のことを思うとともに、横浜の事務所や横浜と東京間を往復する十数隻の曳船がどうであらうかと、仕事のこと、仕事にたずさわる人々のことを案じながら、不安で、次郎を目のとどくところにおきたかった。

そこへ、支配人夫婦がめいめい風呂敷包を両手にさげて、精魂つきた恰好で転がりこんだ。夫人は石畳の上に崩れるように坐るなり、水を下さいと喘いだ。水をあおるようになってから、あわてて髪を手でなおしはじめたが、涙がよごれた顔に糸を引いて流れ、一言も口をきかなかった。支配人は田部氏の差出したウイスキーの盃を、一気に口にあけるなり、

「すみませんでした。芝君を深川の事務所へやって……死なせにやったようなものでした」と、頭をたれて、むせびあげるのをこらえた。

皆しんとして、瞬間、労わる言葉もでなかったが、横にいた節子がそっと次郎に囁いた。

「有島先生はお亡くなりになってよかったですわね」

「どうしてですか」

「だって、こんな地震にあわないで、すんだんですもの——」

ああ、そうか、と次郎は自分に囁いた。この場合、有島先生のことを突然言われて、はじめて節子の存在を認識したように、目のさめる思いで、節子を見たが、ちがった返事を予期した

のだ。しかし、そう答えたのも、正午からの体験が、恐怖をともなって、どんなに激しく心をいためたかと、同情した。

「森さん、東京は、これから、生地獄のようになるのではありませんかしら——」

大きな瞳で、じっと次郎の顔を見上げていた。

「どうして、そんな不吉な想像をするんです」

「母から濃美地震の時のことを聞いていますから……少女の時だったそうですが、岐阜ですけれど、やはり街が全部焼けて……あとで、食べる物がなくて、みんな餓鬼のようになって、大変だったんですって……母の家も焼けて、米倉だけ三つのこったけれど、米倉を開けて施してしまわなければ、どんなことがおきるか、危険な気配があったんですって……母の父は、米倉を開いて、気前よく全部施米したそうで、そのために、母の家はつぶれることになりましたけれど……今では、岐阜公園に、祖父の顕彰碑が建っています、母は生き地獄だったと、よく濃美地震のことを話すと、申します。地震も火事もこわかったけれど、それ以上に、おびえた人間がこわくなったって……だから、これからが心配ですわ」

「だって、今は文明も進んだから——そんな心配はいりません」

その時、田部氏が支配人に何か話したので、次郎も節子も囁きをやめた。田部氏は支配人を励ますのか、節子の婆やの話をしていた。

「——まだ余震のあるうちに、すぐ出入りの店へ行って、白米や味噌醬油や乾物や蠟燭など買い集めたと言うんだよ。小さい時に濃美地震にあった体験で、すぐそう頭が働いたって、夕方

蠟燭を持って来てくれて、事もなげに話していたが……それでこの家でも、すぐ出入の店へや
ったそうだが、その時には、もうどこでも、売りおしんで、なにも売ってくれなかったんだ
よ。この地震と火災——災害はいつまでつづき、どこまで拡がるか、わからんけれど、なあ松
浦君、今は力を落していいで、じっくりなんでも身に受けて体験しておけばいいんだよ。そ
の体験がいつか、きつと、智慧や本能を動かす力になって、助けることがあるからな」

支配人もその細君も聞いているのか、いないのか、虚脱状態で、肩を下げていたが、支配人
は大きくうなずくようにして、

「これで、なにもかも、おしまいです。東京中が火の海になって、焼けおちています……火に
追われて逃げながら、日本人が贅沢になったので、天罰だなんて、言ってた人があったが、ほ
んとうにそうかも知れません。もうおしまいです。残念だが海洋商会だって……第一事務所は
焼けたし、あそこからずっと川向うまで、見る限り一面火の海で、あの勢いでは、曳船も残って
はいないでしょう。深川の事務所のみんなは、無事に逃げおおせたか……浜の事務所だって、
どうですかね。ほんとうに海洋商会もおしまいです」と、自分に言い聞かせでもするように、
呟いた。

「うん、海洋商会の終りかも知れんが、終りなら終りで、立派に終りにするように、落着い
て、ゆっくり考えようじゃないか。なあ松浦君、元気を出すんだよ。東京が焼けたからといっ
て、日本は終りにはなるまい。焼けたあとには、復興事業が起きて、海洋商会も仕事がふえる
だろうじゃないか」

「さようですわ。この人ったら、世の終りのように言いますが……三味線をもって逃げ出したところ、途中で、そんなもの、すてろって、大変な剣幕で……。東京中が焼けくずれて、東京も、海洋商会も、おしまいになったあと、三味線をひける日なんか、あるもんかって……人ごみのなかで煙にまかれて、それは、荷厄介でしたけれど、あれをすてるくらいなら、わたしは、いのちをすてた方がいいと思うのに、とうとう、すてさせられてしまいました。でも、東京は焼けても、きつと復興しますわね。海洋商会だって……わたし、この人はなんと言っても、撥（はた）だけはすてまいと思って、大事に持っていて、それでも、よかったですわ」

常磐津の名取りだという支配人の細君は、ようやく落着いたのか、そう言葉をはさんだが、支配人はきりっとした顔を細君に向けて、

「今日の地震が東京だけだとは思えんからな。どうせ富士火山脈の地震だろうから、意外に大きいんだよ……あしたになつて見ろ、どんな災害だかわかって、みんな胆（い）をつぶすことになるかも知れんからなあ」と、吐息した。

真赤な空の反映で、支配人や細君の顔が赤く光ったが、ふと次郎はこの屋敷が火にとりまかれていような錯覚におそわれて、立ち上った。見て来ますと、言うなり、門の外へ出た。

翌日からが大変であった。想像のできない大事件がおそった。一睡もできないで夜があげたが、空一面に火煙の余韻のせいか、よどんで、無気味な色の太陽が出て、いつまでも褐色な光

がさしていた。

次郎は自分の視力が衰えたのかと、疑って、井戸端で、幾度も清水で目を洗った。もう火事はおわったか、まだ燃えつづけているのか、遠くに何か爆発するような音が時々するが、皆目わからない。どことどこが焼けたか、災害の状況もわからない。屋敷のうらの崖下の市電の軌道を、前夜から、しきりなしに、天現寺橋の方へ黙々と逃れる人々が、きけば、地獄に化した街の様子を告げるが、どこまでが、真実か、新聞も号外も出ないし、東京が機能を、失って、知りようがないから、いっそう不安になった。

松浦さんが若い所員と深川の事務所の様子を探りに出ようと、話しているので、次郎もいっしょに出掛けて、役所へ行こうと、身支度した。その時、前の家から伝達があった。朝鮮人の襲撃にそなえて、自警団を組織するから、男子はすぐ成瀬邸の前に集合せよというのだ。田部家を代表して、次郎が行ってみることにした。

隣りの船成金の大邸宅の鉄の大門が大きく開いて、門前に、縁台がいくつもおいてあったが、ふだん見かける商人などが、物々しい恰好をして控えていた。鳶職かと、次郎はあやしんだが、この人々は前夜から、火の用心のために集って、町内の警戒にあたっていたが、その朝、警察の命令で、自警団に改組したと、言うことだった。勤人らしい人々が集ると、町会長であろう、年かさの人が声を張りあげた。

「みなさん、きのうの大地震につづいて大火災で、日本は内乱状態です。今朝戒厳令がしかれて、自分たちの町内は自分たちの手で、まもらなければならなくなりました。各町内とも、町